書 評

『よくわかる補助犬同伴受け入れマニュアル』

編集／補助犬同伴受け入れマニュアル作成委員会
 監修／特定非営利活動法人日本介助犬アカデミー
 発行／中央法規出版（2004年8月）
 定価／1260円

藤原 健
 毎日新聞大阪本社編集局長
 Fujiwara Ken

無視せず、関心を持ち続けよう～

この6月から2年3カ月ぶりに大阪本社勤務になった。こちらに戻ってきて、すぐに気づいたのは、「補助犬受け入れ」のステッカーを貼った施設が多いことだった。兵庫県宝塚市に住む木村佳友さんの使用犬だった介助犬シンシアをシンボルとする運動が関西を中心に浸透してきたことの証しだろう。8年にわたって木村さんと共に「シンシア・キャンペーン」を続けてきた私たち毎日新聞のスタッフにとって、誇らしくも思う。

私たちは毎年、連載に加えて「補助犬シンポジウム」にも取り組み、補助犬の受け入れを訴えてきた。身体に障害を持つ人の自立と社会参加を促進する身体障害者補助犬法ができた。この法律に血を通わせるのは、私たち一人ひとりの自覚による。お互いの人権を尊重し合える品位ある社会をつくりあげるためにも、世界に類例のない法律の意義と意味を理解しよう……。シンポジウムでの、そんな中身がこの『よくわかる補助犬同伴受け入れマニュアル』に盛り込んであり、「やさしさの輪」の広がりを感じた。

盲導犬、介助犬、聴導犬の総称である身体障害者補助犬とは、障害を持つ人にとって「生きた自具具」であることを、私たちは、まず知らなければならない。この本はそのことを最初に強調している。

補助犬は外形上、当然ながら、犬である。しかし、よく訓練され、障害に応じた働きで人間を助ける機能を持っている。「かわいいねえ」とペット扱いする動物ではないし、「犬嫌いの人がいるので同伴を遠慮して欲しい」と拒否する存在でもない。障害の有無にかかわらず、人が人としての尊厳を保つための仕組みがバリアフリー社会だとすれば、補助犬はバリアフリー社会に欠かせない重要な一員であることを理解しなければならない。法律ができる前から、そして、法律ができた後も、このことを補助犬の使用者とそ

の支援者は訴え続けている。こうした思いに耳を傾けることが、受け入れにつながり、私たちの社会を豊かにもする。

だが、補助犬の使用者団体が宿泊を拒まれたり、飲食店やホテルへの入店・入館を断られたりする例は後を絶たないのも現実だ。だからこそ、受け入れへの理解を丁寧に求めながら、法律の理念をわかりやすく解説するこのマニュアルが必要といえるだろう。

本には、抽象的な「論」はない。飲食店、小売店、ホテルや旅館などの宿泊施設、温泉や銭湯、レジャー施設、スポーツ施設、映画館といった多くの人が出入りし、障害者も利用する店や施設で補助犬を受け入れる場合に想定される質問に答える形式を貫いている。さらに、一時的な立ち入りだけでなく、アパートやマンションで補助犬と一緒に住むことを望む使用者の権利についても言及している。100ページを少し超えるが、写真やイラストがふんだんに使っており、読みやすいのも、ありがたい。

お互いを無視せず、関心を持ち続けることが健全な社会だと思う。補助犬とその使用者に今後も寄り添い、この本を活用しながら共に生きることを考え続けていきたい。